

# 日本語学習者における終助詞「ね」の習得状況 — 学習環境と中間言語に着目したコーパス調査を基に —

齋藤 里美<sup>†</sup>

## A Study on the Acquisition of the Final Particle “ne” by Learners of Japanese Based on a Corpus Survey Focusing on Learning Environment and Intermediate Language

Satomi Saito

### 1. はじめに

日本語学習者の発話に、母語話者と何かが違うと感じたことはないだろうか。その一つに終助詞「ね」があげられる。日常会話に終助詞は不可欠とされるが(ナズキアン2005)、学習者との会話で終助詞「ね」を多用していると感じたり、違和感を覚えたりすることがある。学習者の依頼場面での「ね」の多用を失礼だと母語話者が判断したとする研究もある(小池2000)。「ね」の適切な使用法を学習者に示す必要があると思われるが、その用法は神尾(1990)など様々な議論がされているように複雑で、いまだ定まったものがないと言える。

母語話者、学習者はどのように「ね」を使用しているのか。「多言語母語話者の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下I-JASとする)」のインタビュータスクを用いた調査から、違和感の要因がどこにあるのか考えたい。

終助詞「ね」の基本的な意味については、命令形、依頼形への接続から「聞き手への共有の確認・促し」とした滝浦(2008)を参考にした。

### 2. 調査方法

データにはI-JASの第4次データ中のインタビュータスクを使用した。母語話者の調査者と、学習者である協力者または母語話者である協力者との約30分程度の半構造化インタビューである。第4次データの協力者は15か国12言語の海外環境学習者700人、日本国内教室環境学習者75人、日本国内自然環境学習者50人、日本語母語話者50人の計875人である。研究の対象は協力者のみとする。

まずI-JASの検索を利用し、「文末から1語/終助詞ね/

語彙素ね」の条件で形態素検索を行って終助詞「ね」を使用した発話を取り出した。そのうち海外環境学習者、国内教室環境学習者、国内自然環境学習者、日本語母語話者の4グループそれぞれの「ね」の使用数を集計し比較した。I-JASで配布されているプレーンテキストも適宜参照した。

また、学習者はすべて日本語レベル確認テストとして「日本語テストシステムJ-CAT」と「SPOT」を受けている。この二つのテストには相関関係がみられると李(2015)では述べられている。ここでは学習者のレベルの参考としてSPOTの得点を載せる。筑波日本語テストTTBJのHPによれば、SPOT90の合計得点0~30点は日本語学習経験がほとんどないレベル、31~55点は初級であり日本語能力テスト(以下JLPTとする)N4、N5相当、56~80点は中級でありJLPTのN3、N2相当、81~90点は上級でありJLPTのN1に相当するとされている。

### 3. 量調査の結果

#### 3.1 日本語母語話者・国内環境学習者・海外環境学習者の終助詞「ね」の使用数

学習者は初期の段階で応答の定型として「そうですか」「そうですね」を学ぶ。学習者が使う終助詞は初級段階ではそうした定型表現の中で使われることが多く、さらに「そうですね」は「そうですか」に比べて誤用が多いとの研究がある(初鹿野1994)。このことから、「そうですね」については別に考察が必要と考え、今回の対象から除くこととした。検索で「そうですね」を取り出した後「おいしそうですね」など応答の「そうですね」ではないものを目視で確認して応答の「そうですね」のみを取り除いた。その結果の、4グループそれぞれの「ね」の使用数を表1に示す。総語数はI-JASで公開されており、ここではインタ

<sup>†</sup>2020年度修士(人文学プログラム)、現所属：東京外国語大学オープンアカデミー

表1 I-JAS インタビューにおける終助詞「ね」の使用数

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 50人	海外 700 人
総語数 (記号等 除外)	202009	144565	178784	1532278
ね使用数	2855	1915	1119	4934
調整頻度 (100万 語あたり の頻度)	14133.0	13246.6	6258.9	3220.0

ビュータスクにおける協力者による発話のみの総語数を記した。

調整頻度で比較すると「ね」の使用数は母語話者、国内自然環境学習者、国内教室環境学習者、海外環境学習者の順に多くなっている。母語話者と学習者では話す速度が違う。そのためグループ間の数値の差は見かけほど大きくないのかもしれないが、それを考慮に入れても国内自然環境学習者は「ね」を多く使っていると言えるだろう。簡略的に数値の関係を示すと、次のようになる。

母語話者 > 国内自然 > 国内教室 > 海外環境

この順は学習者が母語話者の発話に触れる機会の多さと重なると考えられる。「ね」は国内の日常的な発話からのインプットで模倣されやすい可能性がある。

次にこの約30分のインタビュー内で何人の協力者が「ね」を使用したか。表2に示す。

表2 I-JAS インタビューでの終助詞「ね」の使用人数

	母語話者	国内自然	国内教室	海外
協力者数	50	50	75	700
ね使用人数	50	48	63	485
ね不使用人数	0	2	12	215

母語話者はインタビュー内で全員が「ね」を使用していたことがわかった。母語話者の日常会話で終助詞は欠かせない(ナズキアン2005)とされるが、I-JASによる学習者の使用との比較にも、それが表れていると言えるだろう。国内自然環境学習者でも協力者50人中の48人というほぼ全員が「ね」を使用しているとの結果になった。日本語での日常会話に近いところにいる学習者ほど使用が多いことから、日常会話に不可欠という言い方が肯定できると言えるだろう。

それを確認する一つの目安として国内環境と海外環境での使用者数の違いを比較した。国内自然環境及び国内教室環境学習者を1つのグループとし、海外環境学習者との2

グループ間でカイ二乗検定と残差分析を行った。その結果を表3に示す。

表3 国内環境学習者(自然+教室)と海外環境学習者における「ね」使用人数(人)と統計結果

	国内 125人	海外 700人
ね使用人数	111▲	485▽
ね不使用人数	14▽	215▲

( $\chi^2(1) = 19.180$ ,  $p < .01$ )

誤差1%の水準で国内環境学習者の「ね」使用者が有意に多いという結果となった。使用者の数からも、「ね」は国内環境での影響が大きい可能性があると言えるだろう。

表1から3に表れた結果から、使用数でも使用人数でも母語話者が一番多い結果となった。学習者の「ね」の多用に問題があるように思われていたが、量的には使用数でも使用人数でも母語話者がもっとも多い結果となった。量に関わらず母語話者による「ね」には違和感を覚えないのに、学習者による「ね」には違和感を生じさせる場合があることになる。堀池(2007)では、中級から超級レベルの学習者のうち、中級レベルのグループでは普通体+「ね」が容認されやすいとも述べられている。そこで、「ね」が関わる発話末表現として普通体+「ね」について検討したい。

### 3.2 普通体に接続した終助詞「ね」について

I-JASのインタビューは、初対面の調査者と協力者である日本語学習者、あるいは母語話者の対話であるので、通常の発話末の文体は「です」「ます」の丁寧体が適切だと思われる。しかし学習者の発話では普通体に「ね」を接続させたものが見られる。それは次のような発話である。例文中の<C>は調査者を、<K>は協力者を表す。

#### <普通体+ね>例①

《協力者ID:CCT23 連番51540 発話番号4720》

台湾 中国語(台湾) 21歳 女性 学生 SPOT82点

<C> やっぱり、その便利なのが、

<K> <はい>

<C> 若い時はいいかな?#

<K> 若い時ね#

母語話者と学習者の発話に普通体+「ね」はどれくらいあるだろうか。使用数をまとめ、グループ間で比較するためカイ二乗検定と残差分析を行った。結果が表4である。

誤差1%の水準で、国内自然環境学習者、国内教室環境学習者について普通体+「ね」の使用が有意に多いという結果になった。

「ね」の使用数については、母語話者について国内自然・国内教室環境学習者が多かった。そこから「ね」は母

日本語学習者における終助詞「ね」の習得状況  
— 学習環境と中間言語に着目したコーパス調査を基に —

表4 母語話者および学習者の普通体+「ね」の発話数のカイ二乗検定と残差分析

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 75人	海外 700人
普通体+ ね	218▽	927▲	279▲	483▽
丁寧体+ ね	2637▲	988▽	920▽	4451▲

$$(\chi^2(3) = 1690.445, p < .01)$$

母語話者の使う「ね」に触れる機会が多い環境で模倣されやすいと考えた(表1)。しかしこの普通体+「ね」の数値からは、単に模倣されているだけでなく母語話者と学習者では「ね」の使い方が異なっていることがうかがえる。学習者の発話が失礼に感じる要因として「ね」の多用が先行研究から指摘されていたが、使用数ではなくこの普通体+「ね」の数に表れているように「ね」の使い方が母語話者と異なっているのが原因の一つだと考えられまいだろうか。

### 3.3 「んですね」使用の量的特徴

普通体+「ね」以外での学習者の「ね」使用の特徴として学習者の発話による多用が指摘されている「んです」(若生2010)に「ね」が接続した「んですね」を取り上げたい。

「んです」は日本語初級の段階で学習し、主な用法は「説明」「主張」(砂川他1998)とされるが、学習者にとって習得が難しい項目の一つである。I-JASではどのように使用されているのかグループごとの使用数を調べ、グループ間で比較するためカイ二乗検定と残差分析の統計処理を行った結果が表5である。

表5 母語話者および学習者の「んですね」使用数とカイ二乗検定・残差分析の結果

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 75人	海外 700人
んですね	202▽	184▲	117	408
んですね以外 の「ね」	2653▲	1731▽	1082	4526

$$(\chi^2(3) = 13.111, p < .01)$$

誤差1%の水準で国内自然環境学習者の「んですね」の使用が多いという結果になった。「んですね」の発話でも、母語話者との使用の仕方とは異なる傾向があることがうかがえる。普通体+「ね」と同様、学習者との会話で違和感を生じさせる原因の一つとなっている可能性がある。

### 3.4 終助詞「ね」と終助詞接続形「よね」「かね」

終助詞「ね」は単独で使われる以外に他の終助詞が接続して「よね」「かね」の形でも使われる。このような終助詞を「接続形」と呼ぶこととする。「ね」に関わる接続形

には「よね」「かね」の他、「のね」「わね」などもあるが、丁寧体とともに用いられるのは「よね」「かね」の2つだと考えられる。I-JASのインタビューの発話末のスタイルとしては丁寧体が適切であるのでここでは「よね」「かね」を取り上げる。これら接続形はI-JASの中でどのように用いられているのか。「ね」「よね」「かね」の発話数とグループ間の比較を行うためにカイ二乗検定と残差分析を行った。

表6 母語話者および学習者の「ね」「かね」「よね」使用数とカイ二乗検定・残差分析の結果

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 75人	海外 700人
ね	2189▽	1725▲	1024	4346▲
よね	356▲	144▽	161▲	495
かね	310▲	46▽	14▽	93▽

誤差1%の水準で、母語話者の「よね」「かね」の使用が有意に多く、国内自然環境学習者では反対に「ね」の単独使用が有意に多いという、母語話者と国内自然学習者とは対照的な結果となった。「ね」単独での結果から国内環境では母語話者の発話に触れることで模倣が起こりやすいと考えられるが、接続形については使えるようになることが難しいと推察される。「よね」は国内教室環境学習での使用が有意に多い結果となった。国内教室環境学習者は、母語話者の使う「ね」に接しながら教室での学習機会を持っている。「よね」は教科書で扱われているので、その効果が国内自然との違いとして有意に出た可能性がある。海外学習者については、表1の調整頻度での比較において「ね」使用数自体が最も少なかったことを考え合わせると、接続形まで使用できるようになっていないと言えるだろう。

2つの接続形のうち特に「かね」の使用は学習者では少ないが、母語話者では「よね」の使用数356、「かね」の使用数310となっており、母語話者では使用数に顕著な違いはないと言えるだろう。「ね」単独の使用だけでなく、どちらの接続形も母語話者の発話では重要なものだと考えられるが、それはそれぞれの使用人数にも表れている。「ね」「よね」「かね」それぞれの使用人数は次の表7のような結果になった。

表7 「ね」「よね」「かね」の使用人数(人)

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 75人	海外 700人
ね使用者数	50	46	63	468
よね使用者数	45	27	23	126
かね使用者数	45	13	19	42



母語話者では50人の協力者のうち45人が「よね」「かね」を使用している。続いて、協力者全体と比較してそれぞれの終助詞の使用者の割合を表8で示す。

表8 「ね」「よね」「かね」の使用人数の割合 (%)

	母語話者 50人	国内自然 50人	国内教室 75人	海外 700人
ね使用者割合	100	92.0	84.0	66.9
よね使用者割合	90.0	54.0	30.7	18.0
かね使用者割合	90.0	26.0	17.3	6.0

母語話者では「よね」「かね」を90%の人が使っていることがわかった。「ね」単体のみでなく、連接形「よね」「かね」も母語話者にとって欠かせないものと言えるだろう。

この調査では、学習者のどのグループにおいても「よね」のほうが「かね」より数値が上だった。この要因について、母語話者の使う「ね」に接しながら教室での学習機会を持っている国内教室環境学習者での使用が有意に多かった点から教科書による影響を考えてみたい。

### 3.5 おもな教科書における終助詞連接形「よね」「かね」の取り扱い

表6において、母語話者では「よね」「かね」の使用数にそれほど差がないにも関わらず、学習者3グループではどのグループも「よね」のほうが「かね」より数値が大きかった。この要因について考えたい。

学習者がある項目を使用できるようになるには教科書によるインプットが重要だと考えられる。母語話者の日本語に接する機会が限られる海外環境ではいっそう教科書の影響を受けるだろう。そこで学習者情報が記載されているI-JASのフェイスシートから、国内、海外で使用されている教科書を調べた。

学習者によっては複数の教科書を挙げている場合もある。タイトルが一度挙げられている場合は1として数えた。国内自然環境学習者と、国内教室環境・海外教室環境学習者というグループ分けは、使用教科書についてのI-JASのグループ分けに従った。

教科書名の挙げ方が、学習者で異なる場合や不完全な場合があるため、おおよその数字ではあるが、国内自然環境学習者では、名前が挙げられた教科書のうちの約39%は『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)だった。37%のその他の教科書の内訳は、『GENKI』(The Japan Times Publishing)、日本語能力検定(JLPT)の問題集、日本の小学校の国語教科書、自治体が作成した教科書などが挙げられていた。

国内教室環境学習者、海外環境学習者では、使用される教科書はさらに多様で海外の出版社による日本語の教科書

も多く、全部で70タイトルほどあった。その中で『みんなの日本語』は最も多く名前が挙げられた教科書ではあったが、国内自然環境学習者での使用が約39%だったのに比べて全体の20%ほどに割合が下がっていた。国内教室環境学習者・海外学習者が使用している教科書の48%にあたるその他の教科書の内訳は、『できる日本語』(株式会社アルク)や『日本語 あきこと友だち』(国際交流基金)のほか様々な海外の出版社による教科書が挙げられていた。これらの結果を下の図1, 2で示す。

図1 国内自然環境学習者の主な使用教科書

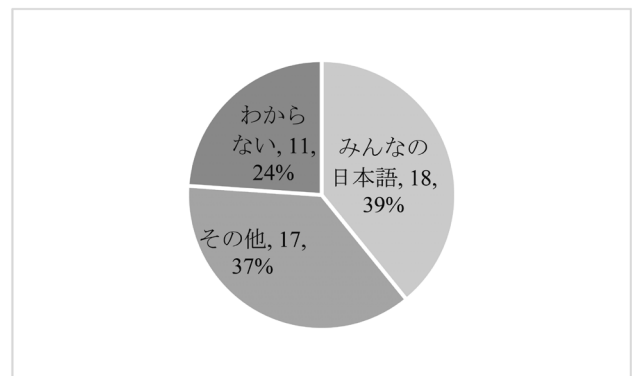
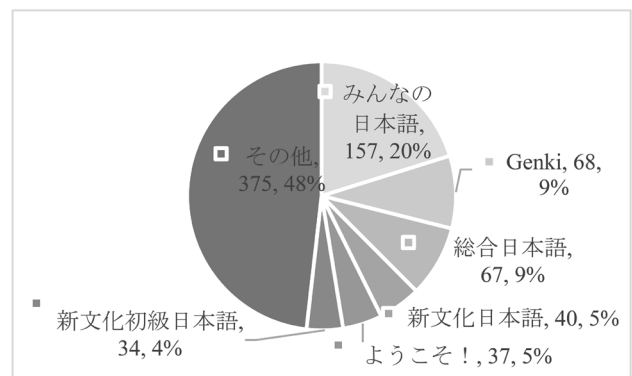


図2 国内教室環境・海外環境学習者の主な使用教科書



次に、これらの中から比較的よく用いられている『GENKI』『新文化初級日本語』『みんなの日本語』『できる日本語』について「よね」「かね」がどこで取り上げられているか調べた。

『GENKII[第3版]I・II』(the Japan times PUBLISHING 2020 初版1999)では、「ね」「よ」は第2課、第17課で、「よね」はL17で会話例のなかで取り上げられていたが、「かね」は取り上げられていなかった。『新文化初級日本語I II』(凡人社2000)では「ね」「よ」は第5課で取り上げられていた。「よね」「かね」は取り上げられていなかったが、『新文化初級日本語』の改定版である『文化初級日本語I IIテキスト改訂版』第31課で「よね」を使った会話例が取り上げられていた。「かね」は取り上げられていなかった。『みんなの日本語初級I・II』では「ね」は第4課、「よ」は第5課で会話の中で取り上げられ

日本語学習者における終助詞「ね」の習得状況  
— 学習環境と中間言語に着目したコーパス調査を基に —

ていたが、「よね」「かね」についてはみられなかった。

以上の教科書は会話例の中で「ね」「よね」が取り上げられている箇所についてだが、『できる日本語初級・初中級』では会話例の中だけでなく、「ね」についてシラバスの第4課の学習項目として「共感」を表す用法、第6課の学習項目として「確認」を表す用法が取り上げられていた。会話例の中では「ね」は第1課から、「よ」は第6課から取り上げられていた。初級・初中級では「よね」はみられなかったが、『できる日本語中級』の第1課では「よね」が学習項目として取り上げられていた。「かね」は取り上げられていなかった。表8に各教科書の取り上げられ方をまとめる。

表8 おもな教科書の「ね」「ね」「かね」の取り扱い

	GENK I・II	新文化 初級日 本語 I・II	みんな の日本 語初級 I・II	できる日 本語初 級・初中 級	でき る日 本語 中級
ね	L2, 7	L5	L4	L1 (シラバ スでは L4, 6)	既出
よ	L2, 7	L5	L5	L6	既出
よね	L17	— (改訂 版では L31に あり)	—	—	L1
かね	—	—	—	—	—

シラバスに組み込まれているのは『できる日本語』のみだが、どの教科書でも「ね」「よ」は、初級の早い段階から会話の中で取り上げている。「よね」は、それぞれの教科書で扱いが異なっている。「かね」は今回調べた中では扱われていなかった。このことは母語話者の発話に直接触れる機会の限られた海外では影響が大きいと考えられる。すべての学習者グループで、「よね」のほうが「かね」より多く使用されている大きな要因なのではないだろうか。

#### 4. 質的調査

I-JASのインタビューは、初対面の調査者と協力者の対話であることから、「丁寧体」の使用が標準になると考えられる。しかしこれまでに述べた量的調査で、国内環境学習者では普通体+「ね」の使用が有意に多かった。

しかし母語話者も「ね」を使った発話2855のうち、218は普通体+「ね」の発話をしている。「丁寧体」の使用が標準的と考えられる会話のなかで母語話者はどのような時、普通体+「ね」を用いているのか、例を挙げて考えたい。

なお、例の中には一般的に「間投助詞」と言われるものも含まれている。この点について、会話においては発話末がどの部分になるのか曖昧になる。例えば<普通体+ね>例①の「子どもながらにね」は、この部分で発話末になっても会話の文として成立する。そのため、「間投詞」かどうか議論が考えられる「ね」も、本論ではI-JASの分類にしたがって「終助詞」として考察の対象にした。

#### 4.1 母語話者における相手に語りかけない部分での普通体+「ね」

日本人母語話者の普通体+「ね」の発話では次のような例があった。

##### <普通体+ね>例①

《協力者ID：JJJ35 連番29100 発話番号1540》

日本語母語話者 35歳 男性 非学生

<C>< {笑} >

<K>いいんじゃないのかなって言う子どもながらにね、思ってたして#

母語話者による普通体+「ね」の特徴に、この例①のように他の助詞とともに用いられ副詞に接続して用いられる例があった。「ね」で導かれる部分が聞き手である調査者<C>に投げかけられているのではなく自身の発話にかかっていることになる。

また、会話の中で日本語母語話者がスピーチレベルを丁寧体から普通体にダウンシフトするタイミングは発話内容・様式と関わっており、感嘆・驚き、感情・感覚などの表出的発話や、独白的な様式において選好されやすいとされる(鈴木 1997)。次のような発話がその例となるだろう。

(料理を一口食べて)「おいしい。」

(寒い屋外に出て)「ううっ、寒っ！」

これらの要素は聞き手に対する意識が発話の前面に出ないものと言え、それゆえ通常、終助詞(とりわけ「ね」とは共起しにくいと考えられる。逆に、もしこうした要素に「ね」を付けて発話したら、不自然に感じられることだろう。次のような例がそれを表していると言えるだろう。

##### <普通体+ね>例②

《協力者ID：GAT19 連番50090 発話番号3520》

調査地：オーストラリア ドイツ語話者 21歳 男性 学生 SPOT55点

<K>お名前を

<C><ん>

<K>, わか#

<C>わす, わ#

<K>わ, んー, あーわからない#

<C>何ですかねー#

<K>わからないね#

<C>そうですか#

<K>は自身の独白的な「わからない」の語断片を繰り返し、最終的に「わからないね」と発話している。こうい

った要素は鈴木(1997)によれば、終助詞「ね」とは共起しにくい要素と言える。これが独白的に「わからない」と発話されるのであれば、違和感は少ないのではないだろうか。これは「ね」を使うのにふさわしくない状況でも学習者の場合では「ね」が使っているという例だと言える。

次の例は、学習者は普通体を選んでいるが、丁寧体が使えないわけではないと考えられる例である。

#### <普通体+ね>例③

《SES09 連番12300 発話番号1120》

調査地：スペイン スペイン語話者 21歳 女性  
 学生 SPOT46点

<C>ちょっと教えてください初めて来ました#  
 <K>あう、あ、えーマドリードは、あーん、きれいな  
 <うん>、えーとーんー、美術と<うーん>、えー、  
 レストランと<うん>、とても面白い、です#  
 <C>へーうん

例③の「(マドリードは)きれいな」で「ね」が接続しているのは、<C>に向かって話しかけられる部分になっている。母語話者では、自身の発話内でかきり方が完結するように用いられているのと異なる。一方あとの発話では「とても面白い、です」と言っており、「丁寧体」が使えないわけではないことがわかるが、「きれいな」の部分では丁寧の要素を落としてしまっている。

この例②③のように、初対面でありながら相手からの普通体+「ね」の発話を直接受け止めることは、母語話者が学習者と対話する際に感じる「違和感」の原因の一つになるだろう。

## 4.2 学習者の普通体選好傾向と「ね」の付加

普通体+「ね」の使用例を具体的にあげてきたが、学習者は丁寧体が使えないわけではなく、インタビューのような場合は丁寧体を用いるほうが適切であると承知していることがうかがえる例をさらに見ていきたい。

#### <普通体+ね>例④

《協力者ID:SES34 連番39840 発話番号4280》

調査地：スペイン スペイン語話者 23歳 男性  
 学生 SPOT52点

<K>あ、{笑} えんー、えーでも、えーえスペイン  
 では、大きな会社ではないね#  
 <C>あそうですか#  
 <K>大きな、え、小さい会社です#

例④では、学習者は一度普通体で発話したあと、その後の発話は丁寧体になっている。丁寧体のほうが適切だという意識があるためだと考えられる。多くの教科書では普通体より丁寧体が先に導入されると思われるが、学習者にとっては学んだあとは普通体のほうが短く使いやすいのかもしれない。

話し手の発話に同意する場合そのままリピートして返答すればよい場合があるが、そうした場合でも学習者は丁寧体でリピートせず普通体を用いている例がある。母語話者

に続いて学習者の使用例を示す。

#### <普通体+ね>例⑤母語話者使用例

《協力者ID:JJJ02 連番28660 発話番号1840》

日本語母語話者 50歳 女性 非学生  
 <C>じゃあ、すごい昔からそこにずっと住んでらっ  
 しゃる  
 <K><ええ>  
 <C>変わりました?こう#  
 <K>変わりましたね#

#### <普通体+ね>例⑥学習者使用例

《協力者ID:EUS50 連番17760 発話番号1690》

調査地：アメリカ 英語話者 26歳 男性 学生  
 SPOT61点  
 <C>何度も行きました?高いですよね#  
 <K>とても高い最近高いね#  
 <C>あ、前は高くなかったですか?

そのまま繰り返すよりも変換する方が難しいのではないかと思われるが、とっさの発話で普通体が選ばれている。自然な発話に近づけようとするためか、親しさを込めようとするためか、「ね」をどのようなものにとらえて用いているのか興味深い。

## 4.3 「ね」が関わるまとまりの例「ですね」

学習者が普通体で終わらせるだけでなく、それに「ね」を接続させるには、自然な日本語らしくしたい、親しさの気持ちを付加したいなどの意図があるのかもしれない。

学習者の発話で、付加することで何らかの意味づけを学習者が意図しているのではないかと思われる独自のまとまりがみられた。迫田(2002)では、学習者の独自の文法といわれており、ある言語を習得する過程で現れる「中間言語」と位置付けられている。I-JASにおいての「ね」が関わることばのまとまりの中にもそうしたものと考えられる例がみられた。その一つとして「ですね」を付加する例を取り上げる。

#### <ですね>例①

《協力者ID:RRS25 連番43700 発話番号2840》

調査地：ロシア ロシア語 20歳 女性 学生  
 SPOT64点  
 <K>でもとっとても綺麗な一<あ>所だと思います  
 <C><うーん>  
 <K>私は鎌倉には一、海があるですね?#  
 <C>ん?#  
 <K>海があるですね?#  
 <C>うん#

とっさに普通体を使ったあと、「ですね」で丁寧さを付加しようという意図があると思われる。このように普通体に「ですね」を付加することは、自然な会話的要素、親しさ、丁寧さを付加したいなどの意図があると推察されるが丁寧体での発話末にも「ですね」が付加されている例がみられた。



#### <ですな>例②

《協力者ID:IID07 連番46090 発話番号2860》

調査地：インドネシア インドネシア語 21歳 女性 学生SPOT61点

<K>でも、今は、あー、インターネットがあり、ある、あります、

<C><んー>

<K>ですな、あーですからー<うん>

学習者の発話ではその他「ましたですな」「ませんですな」「あるですな」が見られたが、母語話者の発話にはこれらはなかった。様々な発話末に付加される「ですな」は、学習者的な日本語の一つの要因になっていると考えられる。

#### 4.4 共話的対話でみられる終助詞連接形「よね」

インタビューを調べる中で、母語話者の対話では調査者と協力者が話題を共有していると思われる場面で「ね」だけでなく「よね」が見られる場面があった。「よね」の意味は「ね」に近く、同意を求めたり確認したりするために使われると言われている(庵・高橋他2000)。母語話者における例は次のようなものである。

##### <共話よね>例①

《協力者ID: JJJ 49 連番76180 発話番号4040》

日本語母語話者 日本語 55歳 男性 非学生

<K>それを成り立たせるにはやっぱりお金、運営資金だと思いますよね#

<C>うーん、じゃまず運営資金ありき、という#

<K>ですよね#

<C>ですなね#

<K>時間はいくらでも作れますもんね#

<C>あーそういう

このように「ね」「よね」を使った表現で会話の内容に対し会話の参加者が互いに共感を示しその場を共有しているかのような雰囲気が生じている場面が母語話者では見られた。

不完全な相手の発話のその後の意図を予測し、それを補完しながら対話が進んでいく談話の形式は「共話」(水谷1988)と呼ばれている。水谷(1988)では、「共話」の特徴を①相手が言ったことをそのまま繰り返す②言い換える③相手が途中まで言ったことを引き取って文を完成させる、としている。I-JASのインタビュータスクでもそうした特徴に当てはまる例が見られた。

##### <共話よね>例②

《協力者ID:FFR63 連番57690 発話番号3820》

調査地：フランス フランス語 21歳 女性 学生 SPOT66点

<C>じゃ、家を建てるのは#

<K>はい、田舎です、東京#

<C>でも、不便よー#

<K>ですよな、はい#

<C>ね、学校も少ないし#

これは学習者による例だが学習者では母語話者での会話ほどこうした共話的な対話は見られなかった。その理由が学習者の母語でこうした会話形式が取られないためなのか、学習者の日本語レベルの問題なのかは、別の調査が必要だろう。共話的会話のパターンは「日本語学習者の中上級者がつねに遭遇する困難さ」であり、「元来親しいサークルにおけるコミュニケーションに根差す談話形式である」とされる(佐々木1995)。それがI-JASのインタビューという初対面同士の会話でも見られることがわかった。

#### 4.5 母語話者の会話における話題共有の過程

共話的な会話場面で「よね」が見られる例を挙げたが、母語話者同士の会話で、「か」による質問に「ね」で応答するうちに話題共有がされていくような流れが見られる例があった。次のような例である。

##### <話題共有の過程>例①

《協力者ID: JJJ30 連番3410 発話番号260周辺》

日本語母語話者 日本語 55歳 男性 非学生

<C>台湾ラーメンですか? <はい> 何故(なぜ)台湾なんですかね?

<K>あれも不思議なんですけれどー <はい>、要するに、こっちで言うと担々麺のかなー辛い(からい)んですよ

<C>あーそうなんですか

<K>はい、でも一名古屋発祥でー

<C>あ名古屋発祥なんですか

<K>発祥、だけど台湾ラーメンなんですよー <えー>、で僕らもさっき言ったあんかけスパゲッティとか台湾ラーメンとかは <はい>、ソウルフードなんですよな

<C>あそうなんですか

<K>そうそう <へー>

もう一例、こうした例を示す。

##### <話題共有の過程>例②

《協力者ID: JJJ09 連番56930 発話番号4220周辺》

日本語母語話者 日本語 46歳 女性 学生・非学生無回答

<C>韓国好きなんですか?

<K>タレントさん {笑}

<C>あー好きなタレントさん

<K>ペヨンジュン

<C>ペヨンジュンが

<K>とか <はいはいはい> 好き前好きだったので、

<へー> 今そうでもないですけどね

<C>うーん、でもいっぱいいますよな、韓国のねー

<K>いますもんねー

<C>タレントさんねー素敵な人が

多様な状況が考えられる自然な会話では、常に規則正しく終助詞が現れるわけではないが、「か」で質問を投げかけ

て場面で話題が共有されていくなかで「ね」や「よね」が使われ、その付近がもっとも話題の共有が高まっているということはあるのではないだろうか。そのように考えられる理由として、対話が始まったばかりの冒頭付近の「か」には「ね」「よね」による応答はあまり見られなかったことも挙げられる。例①では「台湾ラーメン」について共有が高まったところで「よね」が表れて、相手が「そうですね」で共感を示している。終助詞によるこうした応答により対話が自然な流れの日本語に聞こえる、という面はあるのではないだろうか。

## 5. 考察

学習環境と中間言語に着目したコーパス調査から、日本語学習者における終助詞「ね」の習得状況と使用例をみてきた。ここからどのようなことが言えるか考えたい。

量的な調査から、終助詞「ね」は協力者である母語話者が全員使っていることがわかった。自然な発話に終助詞「ね」が欠かせないことが裏付けられたと言えるだろう。「ね」の接続形「よね」「かね」についても数こそ「ね」ほど多くないが母語話者の90%がインタビュー中で使っていた。対話に終助詞が欠かせないことが表れていると言える。

学習者グループでの使用数からは、国内自然・国内教室環境の使用が使用数・使用者数ともに母語話者と近い傾向にあり、特に自然環境学習者は母語話者に近いことから、「ね」には母語話者が使用する「ね」によるインプットから模倣されやすいと考えられる結果となった。しかし「ね」の使い方の内容をよく見ると母語話者と学習者とは異なっていた。丁寧体が標準的だと考えられる初対面のインタビューにもかかわらず、国内自然環境学習者は普通体+「ね」を多く使用していた。教室で習わないことで、母語話者の使用に直接影響を受け、特徴的な使用の仕方をしているのだと考えられる。「んですね」の使用も国内自然環境学習者では有意に多かった。学習者の発話で感じられる違和感の原因の一つは数としての「ね」の多用ではなくこうした母語話者とは異なる使い方にあるのではないだろうか。

また、母語話者にも普通体+「ね」使用があるが、使い方が学習者は異なっていることがわかった。母語話者が普通体+「ね」を使う場合は副詞を伴っていたり「ね」以外の助詞を伴っていたりするなど、自身の発話内で完結する部分で用いていた。一方学習者では、相手に語りかけたり相手からの返答が期待されたりする発話で普通体+「ね」が使われていた。普通体+「ね」だけでなく自然環境学習者には「んですね」の多用傾向も見られた。これらのことは母語話者が学習者の発話に対して覚える違和感の要因の一つになり得るだろう。

接続形の「よね」「かね」については母語話者の90%がインタビュー内で使用していることから対話での重要性が

示されたが、学習者では国内環境であっても使えるようになることが難しい傾向が見られた。そうした中、国内教室環境学習者の「よね」の使用の多さから、教科書の影響の重要性が考えられた。海外においては母語話者の会話に直接触れることは限られるだろうから、模倣の機会は限定されることになる。教科書の影響が重要となるが、母語話者の「ね」に触れる機会が少ないため、「ね」についても連接形についても海外環境学習者の使用には教えられてもなかなか使えない傾向が見られた。

質的に使用例を見た結果からは学習者は丁寧体を使えてもとっさの発話では普通体を持ちいる場合があることがわかった。そうした普通体の使用に「ね」を付加させる例には、学習者による「ね」の使用に対する何らかの意味付けがある可能性がある。「ですね」を終止形の普通体に接続させる発話や丁寧体の「あります」や「ありません」などに接続させている例も見られた。こうしたことから、「ね」や「ですね」に親しさを付加させたい、あるいはは自然な会話らしくしたいといった学習者独自の中間言語的な意図がある可能性があり興味深い。初対面の調査者と協力者間でも共話的な会話が見られることがわかり、そうした会話の中で話題が共有される場面で「ね」「よね」の使用が見られた。

国内環境で母語話者の日常会話に接する機会に近いほど「ね」が使用されていたが、使用しているからといって母語話者と同じ使い方をしているわけではないことが今回示された。国内教室環境学習者の「よね」の使用数に見られたように、教科書の影響が考えられる例も見られたが、教えられただけでは学習者はそのようには使わないことは興味深い。

「ね」は母語話者の共話的な会話場面で用いられ、母語話者の日常会話に近い環境の学習者ほど多く用いられている。そこから母語話者が使用する「ね」を学習者がどのようにとらえ使用しているか考えるきっかけが得られるのではないだろうか。

## 謝 辞

本論文の作成にあたり、ご助言、ご指導を下さった放送大学大学院文化科学研究科教授滝浦真人先生に深く感謝します。副査の放送大学大学院文化科学研究科教授大橋理枝先生、合同ゼミでのご助言、ご指導まことにありがとうございます。OB・OGの先輩方、滝浦ゼミの同期のみなさまにも励ましをいただきました。

みなさまのおかげで本研究を無事形にすることができました。誠にありがとうございました。

## 参考文献

石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠.(2010).『言語研究のための統計入門』.くろしお出版.



日本語学習者における終助詞「ね」の習得状況  
— 学習環境と中間言語に着目したコーパス調査を基に —

- 庵功雄・高橋信乃・中西久美子・山田敏弘. (2000). 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』. 松岡弘監修. 株式会社スリーエーネットワーク.
- 市村洋子. (2020). 「『ね』の伝達機能: 『そうなんです』『んですかね』の使用に着目して」. 第64回大会計量国語学会. 2020年9月19日.
- 宇佐美まゆみ. (1999). 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女のことば・職場編』pp241-268. ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ・張未末. (2020). 「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」, 「よ」, 「よね」— 『BTSJ日本語自然会話コーパス2018年版』を用いて—」. 国立国語研究所第210回NINJALサロン; 2020年5月26日.
- 大曾美恵子. (2005). 「終助詞『よ』『ね』『よね』再考—雑談コーパスに基づく考察—」『言語教育の新展開: 牧野成一教授古希記念論集』. ひつじ書房.
- 神尾昭雄. (1990). 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』pp73-78. 大修館書店.
- 小池真理. (2000). 「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か—『依頼』の場面における母語話者の発話と比較して—」. 北海道大学: 北海道大学留学生センター紀要 第4号 pp58-80.
- 迫田久美子. (2002). 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』. pp110-121. 株式会社アルク.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子. (2016). 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」. 国語研プロジェクトレビュー第6巻3号.
- 佐々木泰子. (1995). 「『共話』の理論に関する一考察(水谷信子先生退官記念号)」言語文化と日本語教育 (9). pp47-59. お茶の水女子大学日本言語文化学会.
- 鈴木睦. (1997). 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」. 田窪行則編『視点と言語行動』. pp45-76. くろしお出版.
- 砂川有里子・駒田聡・下田美津子・鈴木睦・筒井佐代・蓮沼昭子・ベケシュ・アンドレイ・森本順子. (1998). 『教師と学習者のための日本語文型辞典』. くろしお出版.
- 滝浦真人. (2008). 『ポライトネス入門』. pp123-154. 研究社.
- ナズキアン富美子. (2005). 「終助詞『よ』『ね』と日本語教育」『言語教育の新展開: 牧野成一教授古希記念論集』. pp67-179. ひつじ書房.
- 初鹿野阿れ. (1994). 「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察: 『ね』を中心として」. お茶の水女子大学日本言語文化学会: 『言語と日本語教育』8. pp 14-25.
- 堀池晋平. (2007). 「学習者は『ね』の意味をどのようにとらえているか—『ね』の自然さに関する評定調査に基づく考察—」. 日本語教育論集23. pp33-47.
- 水谷信子. (1980). 「外国語の習得とコミュニケーション」. 筑摩書房: 言語生活 344. pp28-36.
- 水谷信子. (1988). 「あいづち論」. 『日本語学』7(13). pp 4-11. 明治書院.
- 李在鎬. (2015). 「テスト分析に基づく『SPOT』と『J-CAT』の比較」. 凡人社: 『第二言語としての日本語習得研究』18. pp53-69.
- 若生正和. (2010). 「韓国人日本語学習者の誤用研究」. 大阪教育大学: 大阪教育大学紀要1人文科学59(1). pp109-119.
- 若生正和. (2011). 「『んです』が多いんです—韓国人日本語学習者の文末丁寧表現の考察—」. 大阪教育大学: 大阪教育大学紀要1人文科学 59(2). pp129-139.